明治十六年九月再版

東洋學藝雜誌

東洋學藝社

緒言

我邦人ノ理學ノ思想ニ乏シキハ識者ノ常ニ憂フルトコロナリ故ニ之ヲ救ハンカ爲ニ此雜誌ニ理學ニ關係アル文章ヲ掲載シテ其性質及ヒ功用ヲ世ニ明ニセンヿヲ力メタリ固ヨリ詰屈解シ難キコトノミヲ討論スルニ非スト雖トモ世尚ホ或ハ此雜誌ノ讀ミ難キヲ困シムモノナキニ非ス因テ更ニ其區域ヲ廣メ文藝上ニ涉レル平易ナル文章ヲモ共間ニ雜ヘ甘苦相半ナラシメ以テ世人ノ望ニ負ク無キヲ期スト云爾

○目録

論説之部

論説	人名	丁数
○人爲淘汰ニヨリテ人才ヲ得ルノ術ヲ論ス	加藤弘之	一、一六、
○題有機化學沿革史後	杉浦重剛	五、
○ヒューム氏自由政治論並ニ評		七、二三、
○學藝論	井上哲二郎	一二、
○叙東洋學藝雜誌	西周	一六、
○水ヲ燃料ニ供スル説		二九、四一、
○非時事小言論	上田秀成	三三、八四、一〇六、一四二
○遊日光山雜記	谷田部梅吉報	三八、六四、
○本誌改良ノ因由ヲ述ヘテ皇帝陛下ノ万歳ヲ祝シ奉ル	上田秀成	四七、
○自然淘汰法及ヒ之ヲ人類ニ及ホシテハ如何ヲ論ス		四九、七一、九一、
○泰西人ノ孔子ヲ評スルヲ評ス	井上哲二郎	五三、
○世界開闢概論	隈本有倘	五六、
○西哲叢談（ジョン、ダルトン）		六五、
○分子ノ解	磯野徳三郎	七二、
○未開ノ遺俗果テ何レノ所ニ滯在スルヤ	松下丈吉	七七、
○日本製造論一斑	川田徳二郎	八一、九六、
○度量衡説附貨幣	皷島晋	一〇一、一三六、一五八、
○答東京經濟雜誌	井上哲次郎	一一〇、
○平賀源内傳	片山沖堂	一一五、
○ハムレット（反譯）	尙今居士	一一七、
○理學ノ快樂		一二三、
○羅馬字ヲ以テ日本語ヲ綴ルノ説	矢田部良吉	一二七、一五一

○日本陸地肉食動物ノ散布	ブラウンス	一三〇、
○形質遺傳ト教育ノ關係ヲ論ス	西村貞	一三五、
○讀韓氏原道	井上哲次郎	一三九、
○キングスレー作悲歌	外山正一	一四三、
○紀特模斯的涅士事	內田周平	一四四、
○思想ノ獨立	金城居士	一四五、
○月洲先生詩鈔		一四五、一七一
○分子ノ重量	磯野德三郎	一五二
○學術上ノ譯語ヲ一定スル論	菊池大麓	一五四
○人類ノ紀元	松下丈吉	一五五、一七九
○支那紙幣史畧	平沼淑郎	一六〇、一八八
○クック氏ノ演說ヲ評ス	鈎玄堂主人	一六七
○岩垣月洲傳	杉浦正臣	一六九、
○援刀隊ノ歌	外山正一	一七〇
○書ハ美術ナラス	小山正太郎	一七二、二〇五、二二七、
○教育學講セサルヘカラス	中川元	一八一
○堯舜ハ孔孟ノ偶像ナル所以ヲ論ス	井上圓了	一八四
○彌爾ノ自由之理ヲ駁ス	井上哲二郎	一九一、二一九
○ダーウヰン氏ノ傳	千頭清臣	一九五、二一九
○ダーウヰン氏ノ訃ヲ得テ懷ヲ述フ	箕作佳吉	一九八、
○鎌倉の大佛に詣でゝ感あり	侚今居士	二〇二、
○讀原道評	杉浦正臣	二〇三、
○文章論	小中村清矩	二〇九、
○理學功用辨	杉浦重剛	二一一、
○謠曲ハ肺氣腫症ノ一因タリ抑モ之ヲ廢棄セン歟	樫村清德	二一二、
○職業教育論	手島精一	二一四、
○カムプベル氏英國海軍の詩	侚今居士	二二三、

○袖萩。用韻倣梁陳體　井上哲次郎　二二三、
○登三笠山。兼寄中村敬宇翁。四十韻　仝上　二三四、
○讀史偶評　天台道士　二三五、
○前白川少將樂翁公偶語　二三六、
○西稗摘譯　內田周平　二三一、

雜報之部

○落雷の說　一四、
○下野那須野殺生石の事　一四、
○砒毒の作用　一五、
○毛ダニ小蟲の毒　一五、
○明治十四年十一月八日水星太陽面を經過せる事　三一、
○新製の風力計　三一、
○佛國巴里府飲食品の撿察　三二、
○ユーカリプタスの効用　四六、
○小豆島龍骨の事　四六、
○地球上製紙の總量　四六、
○言語作出の企　六九、
○銘酒分析表　六九、
○明治十五年一月三十一日の氣象　八九、
○米の分析表　九十、
○石炭油凝結法　一一八、
○東京名家墳墓表　一一九、一四九
○殺生石の分析　一二〇、
○岩城國岩前郡火炎噴出の事　一二一、
○紀州那智瀑布の測量　一二一、
○加賀並に紀伊の木葉石　一四八、
○富士山巖石の分析表　一四九、
○勢州三重郡焦米石の事　一四九、
○東京化學會の年會　一五〇、
○勢州筆捨山の事　一五〇、
○岩佐巖君新鑛石の發見　一五〇、

○水原準三郎君加減の對數發明の事　一五〇、
○神保直吉君の創製　一五〇、
○陸奥砂野の地質　一七五、
○幌内炭山の景況　一七六、
○ジョセフ、クック氏の事　仝上
○勢州北部の金石　一七七、
○專攻學社の事　仝上
○チャーレス、ダーウヰン沒死の事　仝上
○ドレーパーの事　仝上
○本誌投書家人名簿　一七八、
○十五年五月生物學會の記事　二〇六、
○彗星の事　二〇七、
○モスカルデーン之說　仝上
○ロングフェルロー及ひエマーソンの事　二〇八、
○光象分析の發明者　仝上、
○隕石の實驗　仝上
○モールス氏饗應の事　二三二、
○モールス氏の演說　二三三、
○十五年七月東京化學會の記事　二三三、
○弗化水素の試驗　仝上
○獨佛兩國水の欠乏の事　仝上
○十五年七月東京大學卒業生の事　二三四、
○名家墳墓表中の正誤　仝上
○蛋白質組成の新說　二三四、

東洋學藝雜誌第一號　明治十四年十月十日發兌

○人爲淘汰ニヨリテ人才ヲ得ルノ術ヲ論ス

加藤弘之

本文動植物ニ就テ祖先、父母、子孫、苗裔等ノ字ヲ用フルハ甚ダ穩當ナラザレ𪜈適當ノ字アラザルヲ以テ已ムヲ得ザレバナリ讀者乞フ之ヲ諒セヨ

近世有機物進化主義ノ一學派（エボリユーシヨン、セオリー）始テ起レリ蓋シ此主義タルヤ太初至簡至單ノ一有機物漸ク無機物中ヨリ發生シ無數ノ星霜ヲ積ミ次第ニ進化シテ億萬種屬トナリ遂ニ萬物ノ靈長タル吾人々類茲ニ生スルニ至リタル所以ヲ講究スルモノナリ而テ世人此主義ヲ以テ達賓（ダルヰン）ノ發揮スル所トシテ又達賓主義ト稱スト雖𪜈蓋シ此主義ハ其始康的（カント）瓜得（ギユーテ）拉摩克（ラマルク）等諸哲ノ講究ニ胚胎シタルモノニシテ達賓ハ乃チ進化ノ原因ト其作用トヲ發揮シ以テ始テ此主義ノ眞確ナル所以ヲ徵シ次テ華克列（ハクスレイ）黒科耳（ヘツケル）等更ニ深ク之ヲ講究セリ其原因及ビ作用トハ何ゾヤ所謂生存競爭（ストラツグル、ホール、エキシスタンス）ト自然淘汰（ナチユラル、セレクション）ト是レナリ而テ余ガ本題ニ掲ゲタル人爲淘汰（アルチヒシエナル、セレクション）ナルモノハ素ト自然淘汰ニ根據スルモノニシテ唯自然ト人爲トノ別アルノミナレバ人爲淘汰ノ理ヲ說カント欲セバ必ズ先ヅ自然淘汰ノ理ヲ明カニセザルヲ得ズ故ニ先ヅ自然淘汰ノ理ヲ概論シ次テ人爲淘汰ニ及ボシ以テ本題ニ移ラントス」

凡ソ有機物体即動植二物ハ其生存ヲ保維スルガ爲メニ常ニ諸種ノ物体ト相競爭セザルヲ得ズ多クハ無即或ハ日光、寒熱、空氣、風雨、現象、海陸山川、地味等ノ如キ無機物ト競爭シテ是等無機物ガ及ボス所ノ有害ナル感應力ニ耐エザル可ラズ或ハ有機物中異種屬若クハ同種屬ト競爭シテ之レガ壓倒力ニ耐エザル可ラザルガ如キ即是レナリ例ヘバ動植物ノ寒地ニアルモノヲ以テ之レヲ熱地ニ移ストキハ能ク之レニ耐テ猶其生存ヲ保維スルモノアリ又之ニ耐フル能ハズシテ遂ニ斷滅スルモノアリ而テ甲ハ即能ク熱ト競爭シテ其有害ナル感應力ニ耐フルモノト云フ可ク乙ハ熱ト競爭スル能ハズシテ其有害ナル感應力ニ耐エザルモノト云フ可シ熱地ノ動植物ヲ以テ之ヲ寒地ニ移スモ亦同ジ又暗黒ナル山間ニ生ズル草花ヲ以テ之ヲ清朗ナル曠原ニ移植ストキハ能ク之ニ耐テ猶生存ヲ保維スルモノト否

ラザルモノトノ別アリ而テ甲ハ能ク日光ト競爭スルモノト云フ可ク乙ハ能ク日光ト競爭セザルモノト云フ可シ曠原ノ草花ヲ以テ之ヲ山間ニ移植スルモ亦同ジ是レ即有機物ガ其生存ノ爲メニ無機物ト競爭スルノ一例ナリ然ルニ有機物体中ニ於テ互ニ競爭スルハ多クハ滋養ヲ己レニ資ランガ爲メナリ無心トハ雖𪜈但シ此ニ滋養ト云フハ其義最モ廣博ニメ日光、空氣、温素、水分、土地、草木、禽獸等其他動植二物ガ賴テ以テ活存スル所ノモノヲ總稱スルノ語ニシテ動植二物ハ皆此滋養物ヲ己レニ資ランガ爲メニ相競爭スルナリ然レ𪜈互ニ種屬ヲ異ニスルモノハ其資テ滋養トスル所ノ物モ亦同ジカラザルヲ以テ多クハ其間ニ競爭ヲ生スルヿアラズト雖𪜈種屬互ニ類似スル歟若クハ全ク同一ナレバ其資テ滋養ニ充ツベキ物亦同一ナルヲ以テ競爭自ラ烈シカラザルヲ得ズ植物ト動物トハ其資テ以テ滋養トスベキモノ同ジカラズ又植物中若クハ動物中ニテモ種屬大ニ懸隔スレバ其滋養ニ充ツベキモノ同一ナラザルヲ以テ競爭烈シカラズト雖𪜈種屬互ニ類似スルカ若クハ全ク同一種屬ノ間ニ於テハ其滋養物相同ジキヲ以テ競爭實ニ烈シカラザルヲ得ザルナリ而テ此競爭ニ於テハ優者若クハ强者ガ必ズ常ニ捷ヲ獲テ劣者若クハ弱者ヲ壓倒シ以テ滋養物ヲ己レニ資ルハ自然ノ法則ニメ其優劣强弱甚タ懸隔スルトキハ劣者弱者ハ遂ニ全ク斷滅ニ歸スルニ至ルナリ然ルトキハ優者强者ハ遂ニ全捷ヲ獲テ獨リ滋養物ヲ己レニ占有スルガ故ニ滋養昔日ニ倍シテ自己ノ生存ニ大利アルヲ以テ益其体質ノ優ト强トヲ加フルナリ又動物ニアリテハ獨リ体質ノミナラズ心性モ亦共ニ上進スルナリ而テ優者强者ハ其優ト强トヲ己レガ苗裔ニ遺傳スルヲ以テ苗裔ハ其生初ニ於テ既ニ優ト强トヲ固有スルヲ得ルナリ然レ𪜈其固有スル所ノ優ト强トハ皆必ズシモ同一ナルヲ得ズ加之其生存ノ間ニ於テ身外萬物ノ感應ニ由テ其相互ノ間ニ優劣强弱ヲ生ズルヲ以テ又其間ニ競爭起リ更ニ優者强者ガ捷ヲ獲テ劣者弱者ヲ倒シ併セテ自己ノ優ト强トヲ加フルヲ得ルナリ此ノ如クスルヿ數世數十世ヲ經ルトキハ優者强者ハ昔年ノ祖先トハ全ク異レル体質心性ヲ得ルガ故ニ是ニ於テ遂ニ新種屬ト認メラルヽニ至ルナリ今黑科耳(ヘッケル)ノ進化史ニ據テ自然淘汰ノ一例ヲ擧グレバ茲ニ乾燥セ

ル沙地ニ一種ノ草木アランニ草木ノ葉ハ空氣中ヨリ水分ヲ吸収スルニ必要ノモノナルニ沙地ニテハ空氣中ニ水分甚ダ缺乏スルガ爲メニ此草木ハ先ヅ水分ノ缺乏ト競爭セザルヲ得ズ即他語ヲ以テ言ヘハ此水分ノ缺乏ニ耐エザルヲ得ザルナリ（即無機物トノ競爭ナリ）次テ此草木ノ各株ハ此水分ヲ己レニ資ランガ爲メニ互ヒニ相競爭セザルヲ得ズ（即有機物相互ノ競爭ナリ）此時ニ於テハ必ズ葉ノ最モ繁茂セルモノガ最モ夥多ノ水分ヲ吸収スルヲ得ルガ故ニ獨リ能ク其生存ヲ保維スルヲ得テ葉ノ甚ダ繁茂セザルモノハ水分ヲ得ルヿ能ハザルガ爲メニ遂ニ枯死セザルヲ得ザルナリコヽニ於テ葉ノ最モ繁茂セル者ノミ獨リ苗裔ヲ遺スヲ得又其苗裔中ニアリテモ同ク葉ノ最モ繁茂セル者ノミ生存シテ更ニ苗裔ヲ遺シ之ニ反スルモノハ遂ニ枯死スルナリ此ノ如クナルヿ數世數十世ニ至ルトキハ其草木ハ昔年ノ祖先トハ全ク形質ヲ異ニセル新種屬トナルニ至ル是レ即生存競爭ヨリ起レル自然淘汰ノ致ス所ニシテ蓋シ動植二物ノ素ト一源ヨリ漸ク進化シテ今日ノ千種萬類ヲ生スルニ至リシハ皆此ノ如キ作用ニ出ルナリ

生存競爭ト自然淘汰ノ概畧即右論スル所ノ如シ而テ達賓華克列黒科耳等ノ説ニ據レバ凡ソ動植二物ノ組織ハ之ヲ解剖生理二學上ノ實驗ニ徴スルニ全ク同一理ニ歸スルヿ甚ダ明瞭トナリタレバ動植物ノ千種萬類ハ全ク一源ヨリ漸ク進化ニ由テ生シタルヿ決シテ疑フ可ラス又此進化ナルモノハ即彼生存競爭ト自然淘汰トニ出ルヿ是亦決シテ疑フ可ラズト云フ而テ達賓カ生存競爭ト自然淘汰トヲ以テ進化ノ源因作用トナセシモ亦全ク確實ナル証徴ニヨル所ナリ蓋シ達賓ハ花工或ハ牧人ガ草木ヲ培養シ牛羊ヲ牧畜シテ漸ク良種ノモノヲ得ルヲ見テ其理ヲ觀察シ始テ大ニ悟ル所アリテ生存競爭自然淘汰ノ理ヲ發揮シ以テ此生存競爭ト自然淘汰トガ即進化ノ源因及ヒ作用タル所以ヲ講究セシナリ今其概畧ヲ述ベンニ例ヘバ花工ガ極メテ鮮紅色ノ牡丹ヲ得ント欲スルトキハ先ツ初年ニ於テ紅色ノ牡丹數十百株ノ中ヨリ紅色ノ稍薄キモノハ悉ク之ヲ除去シテ務メテ鮮紅ナル者ノミヲ撰ビ之ヲ培養シテ其種子ヲ取リ翌年ニ至リ之ヲ播布スルトキハ概シテ大ニ鮮紅ノモノヲ得ベシ然レモ其中ニ於テ紅色ニ自ラ等差アルヲ以テ又

其中ヨリ稍薄色ノモノハ悉ク之ヲ除去シテ務メテ最モ鮮紅ノ者ノミヲ培養シテ其種子ヲ取リ又之ヲ翌年ニ於テ播布スルトキハ鮮紅色前年ヨリモ大ニ優ルヘシ此ノ如クスルコト數年數十年ナルトキハ遂ニ極メテ鮮紅ナル牡丹ヲ得テ之ヲ昔年ノ祖先ニ比スルニ其形質花色倶ニ全ク異ニシテ實ニ新種屬ト認メラルヽニ至ルナリ又牧人カ毛ノ極メテ柔軟ナル羊ヲ得ント欲スルトキハ數十百頭ノ羊ノ中ニ於テ毛ノ强靭ナルモノハ悉ク之ヲ除去シ務メテ柔軟ナル者ノミヲ牧畜スルトキハ其生メル羊兒ハ概シテ柔軟ナル毛ノモノトナルベシ然レ𪜈其中ニテ又自ラ等差ナキ能ハザルヲ以テ更ニ稍强靭ナル毛アルモノハ悉ク之ヲ除去シテ務メテ柔軟ノ者ノミヲ牧畜スルトキハ其生メル羊兒ハ更ニ大ニ柔軟ノモノトナルベシ此ノ如クスルコト數世數十世ニ及ブトキハ遂ニ極メテ柔毛ノ一羊種ヲ得テ之ヲ昔年ノ祖先ニ比スレバ實ニ別種屬ト認メザルヲ得ザル程ニ至ルト云フ但シ是等ノコトハ日本ニテモ古來往々爲ス所ナリ蓋シ牛馬ノ如キハ眞種ノ牝牡ヲ撰テ之ヲ孳尾セシメテ更ニ眞種ノ牛馬兒ヲ得又其數兒ノ中ニテモ更ニ最モ眞種ノ者ノミヲ撰テ孳尾セシムルコトニ由テ漸ク優等ノ牛馬ヲ得ルハ絶テ珍シキコトニアラズ又錦魚ノ一種ニ琉錦トテ腹部ノ太ク且ツ圓クシテ尾ノ甚タ長大ナルモノアリ錦魚ノ最モ優等ニ居ルモノニシテ頗ル美麗ナルモノナリ此一種ハ素ト丸ト稱シテ腹部ノ太ク且ツ圓キ和產ノ錦魚ト尾ノ甚タ長大ナル琉球產ノ錦魚トヲ孳尾セシメテ稍一新種屬ト稱スベキ者ヲ得タルヨリ更ニ其中ニテ腹部ノ最モ太ク且ツ圓クシテ尾ノ最モ長大ナル者ノミヲ撰テ孳尾セシムルコト數回數十回ニシテ始テ得タルモノナリト云フ其他菊花ノ如キハ新種屬ヲ出スコト往々少シトセス英人西布來ハ鳥類ノ畜養ニ熟セル人ナリシガ余ハ人々ノ好ム所ニ隨ヒ鳥ノ羽毛ヲ三年間ニ變化セシムベシ但シ頭首ノ形狀ヲ變化セシムルニハ六年ヲ費サヽルヲ得スト云ヘリトソ

蓋シ達賓ハ花工牧人ガ全ク人工ヲ以テ此ノ如ク驚歎スベキ事業ヲ施スヲ見テ其理ヲ觀察シ是レ花工牧人カ積年ノ實驗ニ由テ遂ニ全ク人工ヲ以テ動植物ノ進化ヲ營ムニ外ナラザルコトヲ發見セシカバ自然ノ進化モ亦此花工牧人ノ事業ニ均シキ源因作用ニ出ルコト必然ナリト思考シ遂ニ自

然淘汰ノ理ヲ發揮シ以テ大ニ進化主義ノ進歩ヲ致シタリ蓋シ彼花工牧人ガ爲ス所ハ即人爲淘汰ナリ而テ此人爲淘汰ニヨリテ漸ク新種屬ヲ得ルモ自然淘汰ノ爲メニ新種屬ノ漸ク生スルモ其理ハ毫モ異ナル所ナシ唯自然淘汰ニ於テハ彼生存競爭ナル無心ノ源因ヨリ漸ク淘汰ヲ起スト雖モ人爲淘汰ニ於テハ無心ノ競爭ニ代フルニ有心ノ人工ヲ以テスルノ別アルト及ヒ無心ノモノハ遲ク有心ノモノハ早キトノ差ヒアルノミ

以上論スル所ニ於テ自然淘汰人爲淘汰ノ理粗明瞭ナルベシ然ルニ茲ニ自然淘汰人爲淘汰ノ作用ヲ成スニ於テ最モ之レガ要具トナルモノアリ而シテ此要具アルニ非ザルヨリハ決シテ淘汰生スルヿ能ハザルナリ今其概畧ヲ述ヘン

ニ凡ソ動植二物ハ其生活ヲ得ルノ始ニ於テ必ス父母ヨリ体質ノ遺傳（トランスミッション）ヲ受ケ又自己生存中ニ於テ其遭遇スル所ノ身外萬物ノ感應ニ由テ体質ノ養成（アダプテーション）ヲ受ク加之動物ニ至テハ体質ノ遺傳養成ハ又心性ノ遺傳養成ヲ生スルモノニシテ吾人々類ノ如キモ亦此事ニ於テ絕テ他ノ動物ト異ナル所アラズトス而テ黑科耳ノ說ニ據ルニ此体質心性ノ遺傳ナルモノハ蓋シ父母ノ体中ヨリ所謂成形原（プロトプラスム—ニ元形質ト譯ス）ノ數分ト併セテ此成形原ニ具有セル分子ノ活動力トヲ遺傳スルモノニシテ体質及ヒ心性ノ元始ハ全ク此成形原ト及其活動力ニ存ス又体質及ヒ心性ノ養成トハ自己生存中遭遇スル所ノ身外萬物ノ感應ニ因リテ成形原ノ活動力ニ多少ノ變化ヲ生スルヨリ爲メニ体質心性ノ養成セラルヽヲ云フナリ蓋シ彼自然淘汰ト人爲淘汰トハ全ク此二力ヲ假テ始テ成ルヲ得ルナリ（未完）

○題有機化學沿革史後

杉浦重剛

ショーレマル氏曰ク生力ノ問題ヲ明解スルハ只蛋白質ノ物体ヲ聚成スルニアルベシト又曰ク一日化學者此ノ原生ノ蛋白質ヲ聚成シ得ルトキハ蓋シヘーケル氏ノ所謂（モ子ラ）最劣等物ト同一物ナルベシト輓近歐米各國諸流ノ學者ガ擧テ第一ノ問題トスルモノハ原生論是レナリ然ルニ化學者中ニ於テ之ヲ說クモノ寥々聞クナシ予ノ見聞スルトコロハ纔ニ前ノ數言ニ過ギズ茲ニ於テ曾テ思考スル所ノ說ヲ述ベ以テ此ノ問題ニ就テ化學者ト他流ノ學者トノ關係ヲ明ニセントス

諸流ノ學者中ニ於テ生物學者ノ本論ニ最モ汲々タルハ言ヲ俟タズ然𪜈其學業タルヤ唯生物ヲ細撿シ以テ其何ノ種屬タルヤヲ確定スルニ止マルモノナレバ之ヲ創成スルノ問題ニ到ッテハ其責ニ任ズベカラズ或ハ少シク進取ノ氣象アル生物學者ニ於テハ自然發生ノ説ヲ唱フルアレ𪜈苗祖ノ存否ヲ確定スルヿ能ハズ今若シ苗祖ヲ要セズメ自然ニ發生シ得ルトスルモ此等ノ具生体ハ如何ニシテ此ノ生力ヲ得ルヤニ到ッテハ少シモ解釋スルヿ能ハザルベシ若シ又苗祖アリトセバ是レ則チ一個ノ有機物体ニシテ其成分ヲ確定シ之ヲ創成スルハ即チ化學者ノ業ナリ

ショーレマル氏ノ言ノ如ク蛋白質ノ物体ヲ以テ原生物トスル時ハ此ノ物体ハ頗ル繁雜ナル成分ヲ具フルモノナルガ故ニ無數ノ同分異性物ナカル可ラズ即チ同分異性トハ其成分ヲ同フメ其微分子ノ位置ヲ異ニスル者ヲ云フ假令ヘバ碁石ヲ盤面ニ置クニ其數ハ同フシテ其配置ノ樣ハ無數ナルニ同シ果メ然ラバ各種ノ生物ハ各種ノ原生物ヨリ生シ夫ノ或ル生物學ノ大家ガ衆生同原説ノ其當ヲ得ザルヤ明カナリ夫レ如此ク生物學者ハ原生物ノ根原ヲ推究スルニハ必ズ化學者ノ力ヲ藉ラザルヲ得ズ然𪜈化學者モ亦タ獨任シ難シ

蛋白質ノ物体ヲ以テ原生物トスルトキハ生力ハ此ノ物体固有ノ性質トセザルヲ得ズ即チ磁性鐵鑛ノ磁石力ヲ具フルニ齊シカルベシ然ルトキハ生力モ亦タ一種ノ力ナレバ他ノ力（即チ光、熱、電氣等）ヨリ變化シ來ルモノナルベシ而メ此ノ諸力ガ互ニ變轉スルノ摸樣ヲ撿定スルハ物理學者ノ事業タリ

夫レ如此ク化學者ハ此ノ原生ノ蛋白質ヲ聚成シ物理學者ハ生力ト他ノ諸力トノ關係ヲ撿定スルニ至ラバ原生ノ問題ハ稍解説ヲ得タリト云ベシ

縱ヒ前條ノ如ク人力ヲ以テ原生物ヲ得ルニ至ルモ猶ホ生力ノ源因ヲ發明シタリト云フ能ハズ何トナレバ此ノ原生物ヲ聚成スル諸元素ノ如キモ亦只純正ノ一元素ヨリ變化シ來リ此ノ一元素ガ果シテ本來ニ生力ヲ含蓄スルヤ否ニ至ッテハ目下之ニ答フルノ端緒アルヿナケレバナリ

○ヒューム氏自由政治論並ニ評

左ニ抄譯スルモノハ英國ニ於テ哲學及ビ歷史家ヲ以

テ鳴リタルダビド、ヒューム氏ガ當時自治專政ノ二政治ヲ比較シ之ガ利害得失ニ就テ氏ガ意見ヲ下シタルモノニシテ議論ノ着實ナル用心ノ深密ナル實ニ氏ガ平常ノ持論タル實驗主義ニ違ハザルハ論ナク社會ノ變遷ニヨリ君權ノ利用一樣ナラザルヲ論ズルニ至リテハ我國今日ノ形勢ニ就テ多少相影響スルモノナキニアラズ譯シテ以テ茲ニ掲載シ且ツ聊カ私見ヲ加ヘテ之ガ評論ヲ附スルモノナリ

ヒューム氏ハ紀元一千七百一年ノ產ニシテ同ク七十六年ニ卒ス然レバ今假リニ此論ヲ著セルハ氏ガ末年ニアリトスルモ既ニ百有餘年ノ久シキニ及ベバ今日ヨリ之ヲ見ル時ハ皮相上多少迂遠ナルガ如キモノナキヲ保セズ然レ𪜈其迂遠ナルガ如キハ偶以テ氏ガ卓見ヲ証スルニ足ル可シ

編者識

方今社會ニ立テ政治論場ニ筆ヲ弄スルモノ若シ能ク甲黨ノ癖說ニ惑ハズ乙派ノ偏見ニ流ルヽヿナキヲ得バコレ即チ人生社會ニ無比ノ公益ヲ來ス可キ一大理學ヲ研究スルモノニシテ且其餘益ノ及ボス所夫ノ一個々々ニ知識ノ滿足チ願フテ常ニ之ガ爲ニ汲々タルノ輩ノ爲ニモ其利益ヲ授クルヿ又少々ナラザル可シ然リ而テ世界ノ幼稚ナル實驗ノ不充分ナル余未ダ政治上萬世不朽ノ眞理トシ一般萬通達フヿナキ事實アリテ存スルヤ否ヤヲ熟知セルカ果タ然ラザルカハコレヲ疑ハザルヲ得ザルナリ否ナ今ニシテ此ノ如キモノヲ熟知シ得可キヤ否ヤヲ知ル能ハザルナリ吾人ガ漸ク實驗スル所ノモノハ仍ホ僅ニ三千年ノ間ニ過ギズ然レバ吾人カ此學ヲ考究ス可キ理法トテモ他百般ノ理學ニ於ケルト一般其完全ナラザルハ言ヲ待ズ然ルヲ況乎此學ノ如キ之ヲ考究スルニ方リ自然必須ノ論礎トモ云フ可キ下題等ノ甚ダ不充分ナルニ於テオヤコレヲ例スレバ德義否德ヲ論ゼズ孰レモセヨ今之ヲ進達セシトスレバ其進級ノ度ハ將ニ如何ナル點ニ達シ得可キカ人生社會ノ敎育風俗ヲ一變シ又其主義輿論ヲ變更スルノ急ナルトキハ結局果〆何等ノ狀況ヲ呈ス可キカ等ノ疑問ハ實驗上未ダ辨解ス可キモノナク從テ之ヲ拾知スルモノアルヿナシ」

マキヤベルハ古今ノ奇才タル疑フ可キモノナシ然レ𪜈氏ガ觀察實驗スル所ハ往時ノ騷亂間斷ナキ歷政々府ニアラ

ザレバ當時ノ伊太利諸邦ノ如キ偏境ノ形狀ニ止マリ頗ル狹少ナルヲ以テ論中殊ニ君權政治ニ關スルモノハ甚ダシキ誤見ヲナスヲ免レズ且ツ氏ガ其國主ノ爲ニ草セル政治上ノ格言ノ如キ斯クマデ後世ノ實驗ト乖戾セルモノハ他又多クアルマジト思フ許リナルモノニヅアル今試ニ之ヲ記サンマキヤベル曰ク暗弱ノ君ハ直諫ヲ納ルヽ能ハズ多ク聽ケバ其孰カ善良ナルヲ撰擇スル能ハズ又其政務ヲ以テ悉ク之ヲ宰相ニ依托スレバ或ハ其才智材能ハ克ク其任ニ堪ユル者ナキニ非ザルモ此等ノ輩ハ久ク宰相タルニ甘ズルモノニアラズ必ズヤ其君位ヲ僭奪シ之ニ換フルニ自家ノ一族ヲ以ス可シト今此說ヲ記ス所以ハマキヤベルガ論議中正實ナラザルモノ少ナカラザレハ茲ニ一例ヲ擧ゲテ讀者ニ指示シ豫メ之ガ注意ヲ牽起セント欲スレバナリ而テ氏ガ如此キ說ヲ主張スル所以ハコレヲ要スルニ只其時代ノ舊古ナルガ故ニ氏ヲシテ政治上ノ眞理ヲ評論スルノ善判者タラシムルニ足ラザルニ由ルノミ然レバ現今歐洲諸國ノ政体ヲ看ルニ王侯ハ幾ンド皆宰相ノ輔佐ニ由ラザルナク斯ノ如クニシテ既ニ二百餘年ノ星霜ヲ經過スル者ナリ夫レ然ルモ猶ホマキヤベルガ言ノ如キ未ダ一例ダモ發出セシヲ聞ガズ何ニヨリテカ向後其發出ス可キヲ妄想スベケンヤシヂュナスシーザーノ廢立ヲ企ツルナシトセザルモフルオレーノ兇惡既ニ諸人ノ熟知スルガ如ク仍ホ狂セザレバボルボンノ君位ヲ奪ハントスルノ意ナカル可シ

前期年ノ末マデハ商業ヲ以テ國政ニ關係セル事業トハ看做サヾルヿナリシガ故ニ太古ノ論者ガ此等ニ就テ論述スルモノハ幾トアルヿヲ聞カザルナリ夫ノ伊太利ノ如キ當時頗ブル此業ニ熱心セル國ニシテ政治家理論者ヲ論ゼズ均ク皆之ニ意ヲ注ガザルハナシト雖𪜈此時代迄ニハ猶ホ默々ニ附シ去リテ一言ダモアルヲ聞カズ是ニ由テ之ヲ觀レバ宇宙間ノ人生ニ商業ノ一大要務タルヲ指示シ其衆人ノ熱心盡力セザル可ラザルヲ明解セルハ特ニ航海上最大ノ權力ヲ占領シ兵權ノ强大ヲ以テ富國隆盛ノ實効ヲ示シタル只二大國ノ先鞭ニ由テ始メテ覺知セルモノニ外ナラズ余ガ此論ヲ著スヤ務テ自由政治ト專制政府トノ比較ヲナシ其利害得失ヲ明カニシ以テ自由政治ノ遙ニ專制政治

ニ優ル所以ヲ解明セントスルノ意ニ出ツレ𪜈顧レバ現時ノ人民ニシテ斯ノ如キ業務ニ堪ユルモノヽ果シテ現存スルヤ否ヤハコレヲ疑ハザルヲ得ズ且ツ自家ニ於テハ克ク之ヲ成シ得タリト思慮スルモ或ハ向後ノ實驗ニ由リテ其説ノ非ナルヲ現スヿノナカラザランヤ必ズヤ其ハ實驗ノ駁撃ヲ被フルモノ尠ナカラザル可シ然レバ斯ノ如クニシテ假令ヒ自ラ眞理ヲ發明セシト想フモ後世ニ至ラバ世人ノ措テ顧ザルニ至ルハ敢テ又疑フ可キニアラザルナリ人生變動ノ不可識ナル古人ノ臆定セルヿノ他ニ幾度トナク變換セルアルハ今更ニ云フマデモナキヿナガラ此等ヲ以テモコレヲ推測スル時ハ向後亦變遷ノ際限ナキヲ想像スルニ足ルベシ蓋シコノ變換ハ人心自然ノ道理ナルベケレバナリ

嘗テ古人ノ觀察スル所ニヨレバ一般學術ハ自由ノ國ニアラザレハ盛大ニ趣カザルモノヽ如シ例ヘバペルシヤ、イヂエフトノ人民ノ如キ其生計ノ安樂ナル常ニ富豪贅澤ノ極ニ居ルト雖モ文雅美術等ノ快樂ニ至テハ幾ント認得セザルモノヽ如ク之ニ反シグリーキ人ハ平生貧困窮乏ノ極ニ居テ生計ノ容易ナラザルヨリ從ツテ甚ダ質素ノ風俗ナルノミナラズ戰爭ノ絶ユル間ナク常ニ危險ノ中ニ生存シナガラ其美術ノ至妙ナルニ至リテハ幾ント完全ノ極ニ達セリト云フ可シ然〆其自由ノ權利ヲ奪去サレシ後モ仍ホ是レ均クグリーキ人タルニ差異ナク加之其富裕ノ點ニ至テハアレキサンヅリヤノ戰勝ニヨリ得ル所ノ者ヲ加算スレバ之ヲ前時ニ比シテ其幾層倍ナルヲ識リガタキモ終ニ再度美術ノ改復ヲ望ム能ハズ學術皆ナローマニ飛去リヌ然レバ又ローマ人ハ當時歐洲中唯一ノ自由國民タルヲ以テ玆ニ一度此好土ヲ占領シ遂ニ百有餘年古來未曾有ノ開明ヲ成セリ然レ𪜈此モ亦其政治上ノ自由ヲ失スルニ至リ學術共ニ衰頽シ世界終ニ野蠻ノ境域ニ陷落セリ」ト今此理解ニ由レバ一ハ即チ利ヲ得テ害ヲ去リ一ハ却テ害ノミ多ク利アルヿナキガ如ク即チ專政ノ下ニハ學術地ニ落チ民治ニ由レバ盛大期シテ待ツ可キ如シトハ是レロンヂェナスガ自由政治ニアラザレバ學術ノ開進ハ期シテ望ム可ラズトスルノ論議ナリ現ニ我ガ英國ニ於テモアヂソン、シヤフテスベリー等有名ノ論者ノ之ト論ヲ同ウスル者アリ顧

フニ此等ノ論者ガ斯ノ如キ主義ヲ取ルモノハ特ニ太古ノ事實ニノミ注目シテ今世ノ事情ヲ觀察セザルニ由ルナル可シ若シ否ズシテ猶ホ此ノ如キ說ヲ主張スル者ナランニハ自由政府ハ原ト吾人ガ本國ノ政体タルヲ以テ兎ニ角ク之ヲ賞贊シ强テ之ヲ愛顧スルノ偏見ニ出ルモノト云ハザル能ハザルナリ

今若シ此等ノ論者ヲシテ方今ローム及ビフロレンスノ現况ヲ觀セシムレバ果シテ又何等ノ議論ヲカ主張ス可キロームハ彫刻詩畵音樂其他百般ノ諸藝皆ナ蘊奧ヲ窺ヒ得テ幾ント完全ノ域ニ達シタルハ皆人ノ熟知スル所ナレ共今其民情ヲ究知スレバ酷壓抑制ノ怨訴一日モ絶ユルヿナシ蓋シ是レ特ニ政治上ノ壓制ノミニアラズ人心ヲ撿束シ思想ヲ抑壓スル宗敎上ノ壓政ニ迄及ビタリフロレンスニ於テ學術ノ萌芽ヲ生セシ頃ハ恰モメチヂー家族ノ之ガ自由ノ欛ヲ去リ始メテ人民獨君ノ地位ヲ剝奪セル時ニアリラフハエル、マイクル、アンヂュロー其外アリヨストー、タツー、ガリレヨー等ノ諸大家ハ必スシモ共和國ノ產出ニアラズ然レバロームバード學派ノ高名ハ素ヨリロームニ讓ラズト雖ドモベ子シヤニ至テハ此等ノ二派ト名譽ヲ共ニス可クモアラズ一般學術上ノ優劣ヲ論ズレバ都テ他ノ伊太利諸邦ニ下ルヿ數等ナリト云ハザルヲ得ズ此他歐洲諸國ニ於テモルーベンスノ學校ヲ開設スルヤアムスタダムニ於テス可キニ然ハ無クシテアンツウヮープニ於テシゼルマン國中禮義ノ中央トモ稱ス可キハハムバークニアラズシテヅレスデンニアリ

然リ而テ當時專政ノ國ニシテ學術ノ隆盛ヲ究メ諸藝ノ極美ニ達スルモノ歐羅巴中佛國ノ右ニ出ルモノアラズ佛人ハ自由ノ民ニアラザルナリ政治上確定セル權利ヲ有スルモノニアラザルナリ夫レ然ルモ仍ホ其學術ノ極意ニ至テハ自由專政ヲ論セズ各國之ト競爭スルモノアルヿナシ英國ハ或ハ哲學者ヲ出ス可シ伊國ハ畵工樂人ニ富メリロームハ雄辯ヲ以テ名ヲ得タリ獨リ佛國ハ哲學者アリ詩人アリ辯士アリ史家アリテ他又畵樂彫刻建築ハ論ズルニ及バズ學トシテ究メザル無ク藝トシテ達セザルナシ然レバ上古ノグリーキ人ヲ除クノ外地球上未ダ此ノ如キモノアラズ其演劇等ニ至テハ仍ホ夫ノグリーキ人ダモ之ガ爲ニ一步

ヲ讓ラザル可ラズ況ンヤ英國ノ如キ之ヲ以テグリーキノ演劇ニ比スルモ仍ホ其優劣ノ少々ナラザルニ如何ニシテ佛國ニアルモノト是レヲ比スルヲ得ベケンヤ此他佛人ハ人生社會上ノ藝術トシテ最モ緊要ニシテ且ツ快適ナル交際談話ノ業ニ長ズルハ世人ガ皆目擊スルガ如クナレバ又敢テ玆ニ贅セズ

按ズルニヒューム氏ガ玆ニ政治ヲ論ズルノ不偏ナル即チ一理學ヲ研究スルモノナリト云フハ蓋シ其意政治學ヲ目シテ理學ノ一端トシ其原理ヲ發見スルハ即チ他ノ諸理學ト一般實驗觀察ニ由ラザル可ラズトスルガ如ク人生實驗ノ不充分ナルヲ記メ未ダ容易ニ確乎タル一定理ヲ拾知シ能ハザルヲ說クモノハ是レ實ニ正說ト云フ可シ今千八百年代ノ現時ニアリテ政治學ノ一理學タルヲ可認セザルモノハ幾ンド是レナカル可シ否ナ百ノ學孰レカ理學ナラザラン」然テ氏ガ又政治上一定理ヲ拾知シ能ハズト云ヘルモ亦甚タ違ハザルガ如シ夫ノ政府ハ到底人生ニ必要ノモノナル乎若シ然ラバ如何ナル政体ヲ以テ無比絕倫ノ善政ナリトス可キ乎又如何ナル政体ヲ以テ時ト地位トニ係ハラズ當ニ最善ノモノトス可キカ等ノ問題ニ至テハ未タ一人ノコレガ確答ヲナスモノアルコヲ聞カズ蓋シ政府ノ原素タル人類ノ心理性理等ニ付テ未ダ確然タル定理ナキヲ見レバ如此ハ仍ホ決シテ怪ムニ足ラザルナリ是ニ由テ之ヲ觀レバ政治上ノ理學ハ氏ガ今ヨリ百年以前ニ預想セルモノト敢テ著シキ進步ヲ現サヾルモノヽ如シ

然レバ自由專政ノ區別モ只是レ比較上ノ評ニシテコレゾ無比ノ利ヲ存シコレゾ永世ニ善良ナル性質ヲ含メリト說ク可キモノナランヤ其得失ノ如キハ時ト地位トニ由テ其可不可ヲ定ム可ク又大ニ目的ニ由テ其評價ヲ異ニスルハ恰モ氏カ玆ニ論ズルモノト一般ナリマキヤベルノ主義ハ近世ノ實驗ニ違フヲ說キテ二百年間歐洲君權ノ諸國ニ於テ君臣相軋轢セシ例ナキヲ說ケリ是レ或ハ然ラン然レ𪜈余ハ盡ク之ヲ信ズル能ハザルナリ氏ガ本國ニ於テチヤーレスチェームスノ亂ハ然マデ遠キニアラズ（君民同治ナルヲ以テ此例ニアラズトスルカ）其外一々揭グレバ仍ホ有ル可シ次ニロンヅェナスカ自由

政治ニアラザレバ學術ノ進達セザルノ論並ニ之ヲ贊成セルアヂソン、シャフテスベリーヲ駁シ今世學術ニ有名ナル歐洲各國ハ强ニ民權政治ニアラザルヲ說キ逐一之カ例解ヲ下セリ是レ其事實ノ如何ハ敢テ尋究スルニ及バズトスルモ其始メ三論者カ主張セルグリース、ローム等ニ學術ノ旺盛ナルヲ以テ悉ク自由政治ナルニ由ルトスルハ或ハ疑ハザルヲ得ザルモノアリ又氏ガ類擧セル君權諸國ノ學術ノ隆盛ナルハ却テ其君權タルカ故ナリト云フニ理アルヲ思フヿナリ盖シ獨君專權ヲ掌握シ其欲スル所ニ從テ之ヲ保護シ之ヲ進張スルニ至テハ夫ノ獨民ノ有力ナルモノヽ個々殊別ノ識見ヲ以テ大事ヲ成サントスルガ如キトハ其差異天地モ啻ナラズ故ニ余ハ將ニ左ノ如ク斷言セントス曰ク政權ノ速力ハ人民獨立ノ勢力ニ反比例ノ力ヲ有スルモノナリ

雜錄

○學藝論

井上哲二郎

我日本之爲國。其形蜿蜒如龍。首于寒。尾于熯。氣候之爽快。土地之膏腴。與支那伯仲。而獨至其學藝。則未能及之也。講道者。未及孔孟。究理者。未及老莊。賦詩者。未及李杜。屬文者。未及韓柳。事謀籌者。未及孫吳。爲治療者。未及扁華。其他至小技末藝。無有一及支那者。其故何也。氣候耶。土地耶。皆非也。然則得無非惡習所致乎。英人某嘗謂余曰。日本之人。有機智而無耐力。巧于模倣而拙于刱造。余竊嗤其妄誕。後遍讀傳記。始知其言之不我欺也。非獨此而已。又由此而知我之所以不及支那。實原于此也。古者自律令法度。至衣冠機器。不模倣支那者殆稀。而至如儒學之分派。無一不有其本原。假令先輩之所唱。緇素相交。醇駁不一。要之。皆本于聖經。元和偃武之後。文敎最振。而名儒林信勝、貝原篤信、木下貞幹、山崎嘉等。主程朱。而間發疑于瑣末而已矣。中江原、熊澤伯繼等。宗陸王。而僅有所取捨而已矣。伊藤維楨與其子長胤。唱古學。駁宋儒。遂至疑大學。斥中庸。卑視詩書易。而特尊論語。物茂卿亦唱古學。詈宋儒。詆思孟。跅弛豪宕。睥睨一世。山縣孝孺、太宰純、安藤煥圖、服部元喬等。皆喜之。而唯止于欲得孔孟之眞意而已矣。未有自發揮丘索之微。而與孔孟

老莊並馳者也。未有自陶鎔詩格文法。而與李杜韓柳齊名者也。未有自畫奇策妙術。而駕孫吳扁華者也。未有自推究天文地質物理製煉等諸學。而大興富國強兵之本者也。可堪遺憾乎哉。大抵世儒唯講支那所講。以爲己學。而支那所不講。則措而不顧。終身兀々。浮沈于支那之圈套中。不泥于訓詁。則逐彫蟲之末技。食盡衣敝。則以爲得顏回季路之行。雖時立說。華而無實。迂而不達。雖時處事。澁而不滑。拘而多礙。何其蠢々也。是以村叟埜翁。亦視儒者。以爲迂腐無用。而儒者恧之。務欲避其名。或曰。予士也。非儒。或曰。士其志也。儒其業也。然以其言行不異于他儒者也。遂不能免儒者之名。淺之爲丈夫也。抑儒者萬世之標準。全邦之所仰。素非可惡之名。而今惡之。何也。由于儒者自汚其名也。汚其名。由于其模倣支那也。潤孫。曰未有由模倣而能秀者蓋千古之確言也。然而儒者懵然不知惡習之所原。氣息奄奄。遂至欲籍士名而避儒名。嗚呼我學術之不及支那者。良有以哉。維新以來。洋學東漸。風俗一變。於是乎苟有餘財者。讀郭索文。而攻實際之學。然而惡習更有甚於昔日者。是無他。彼僅涉獵洋書數篇。則以爲足。或夤緣就官。或鉛槧著書。棲棲逐逐。求毫末之利。賣泡影之名。既無蘭洪鈞之蘊奧。又無探造化之妙工。鹵莽囫圇。走肉而長髯。枵腹而大言。儻取其策論。而條分縷析。則自彌兒極坐脫化來者。芬芬有蒜土臭。不可咀嚼。是輩亦巧于模倣。而拙于刱造者。非耶。果然則雖從今而後經百萬禩之久。猶師泰西。而不能與之爭文華矣。若夫鑒于既往而戒于今日。蓬蓬以興。翼翼以愼。不安于小成。不立于人之籬下。唯發達其天賦之才能而以自己之心。爲學之根據。則彌兒極坐可及矣。孔孟老莊可及矣。李杜韓柳可及矣。孫吳扁華可及矣。既及之而猶不怠。則將文華郁郁。莫之與京。或詰余曰。支那大而舊。日本小而新。小不及大。新不及舊。不是理之當然耶。余曰。不然。如希臘。如羅馬。比之于支那。其大小果如何也。如英。如佛。如獨逸。如和蘭。比之于支那。其新舊果如何也。然而至其學藝。則有夐勝於支那者。由此觀之。我不及支那者職由于知模倣而不知刱造。非由于國之大小新舊而然也。或曰。善。今併記以自勖焉。

中村敬宇曰。邦人巧於模倣拙於創造。非其性也。習爲之也。此篇本此意。而暢言之。

南摩羽峯曰。自大處着議論。亦壯亦快。足以奮起夫人志

氣。實是闘名教之文。余輩雖老矣。請自省自勉焉。

雜報

○下野國那須野近傍には先月初旬の頃に稀なる雷鳴ありしが就中宇都宮驛の如きは市街のみにて落雷せし處十八ヶ所の多きに及べりと然れば其の害を蒙りしも尠からずして夥多の樹木も爲めに折れ倒れざるが孰れも幹の中央より折れて枝のみ折れたるは稀なりとの報を得たれば如何なる故にやと不審を起し二三の書籍を渉りしにゼネバの學士コドランといふ人の書ける者に雷光の樹木の上に落るや枝先は引導力強き故に抵抗するものなく差したる變動も現さゞれど漸々幹に降るに隨ひ引導力を減ずるを以て始めて割斷するに至る然れば雷鳴の時に木蔭に休憩するは大きなる誤りにて木の下にイまんより寧ろ木の上に登るに如ず係る理あればこそ植に巢を作れる鳥雀が屢々其の害を免れしとありと見えたり此は氏が千八百八十年五月五日ゼネバに於て桑樹に落雷せし砌り親しく實驗せられし者なりといふ

○此頃北地を巡遊せし一友人の話に氏は歸途下野那須野に至り殺生石の跡を訪ひしに那須野温泉の近傍に在りて今は其の標點もなく世人が砒鑛の所爲ならんと想像せしに似もやらで其近傍は大きに硫臭を放ち地上には硫黃及び火山質の岩石を散布し地中の温度百五十度(攝氏)餘なりしと然れば往古より砒鑛と想ひし殺生石も實は火山脈の熱に依りて硫氣を發し人畜を殺せしものなるべしと臆測し居たるに近頃の朝野新聞其他二三の新聞紙に高田春耕氏が殺生石試驗の記を載ありしかば是れにて彌々確証を得つべしと讀了せしに文意の解し難きのみならず其試驗法に於ても不充分のものにてありき今原文の一二を擧んに曰く余本年五月該石の小塊を得て之を分析するに先つ法の如く蒸發せしめ(蒸發とは蒸昇(サブライム)のとなるべし)又之を凝固せしむ然れども猶未だ酸化物たるを免れず(若し氏の説の如く該石は硫化砒素即ち雌黃(オルピメント)若しくは鷄冠石(リヤルガル)ならんには之を法の如く密封管に納れ蒸昇せしめば則ち硫化砒素の蒸昇物を得べし又開管中にて熱すれば無水亞砒酸即ち酸化物を得べし)故に木炭を混じ之を製成し得る

りき（即ち純粹の砒素を得ると云ふなるべし）是れ酸性にして鹽基性となることなし（此の意更に解し難し其れ純粹の砒素は不溶解物なるを以て固より酸性ある乎鹽基性ある乎知る能はざるものにして之を中性物と云ふ然れば氏が方法若しくは文に誤謬あるは知るべきなり）云々とありしが記者が斯くまでに理學に疎く然らざれば文字を列べ得ざる人の記を載て世人に誤りを傳ふるは實に歎はしき至なれば暫く記して眞誠なる學士の探索を待ち後ちに再び記載をなすべし

○砒毒の作用を佛國マーセユの藥物學校にて發見せしといふ大要に砒毒の劇烈ならずして徐々に來るときはレシサインと云へる腦の含室有機物中の燐素は漸々砒素にて交換せられ不溶性の砒化物と變し燐は次第に減却す然れども其毒の急劇なる時は砒素燐素を交換するの暇なく曾て腦質の變化をなすとなく唯だ局所の害毒に依りて動物死亡すと云々

○此頃秋田縣下を巡迴して歸京せし人の話しに同縣下平賀郡岩崎村近傍七八里四方の處に往昔より毛ダニと稱する一種の小虫あり其形は塵埃よりも少にして肉眼にては見る能はざる程なれども一回體中に嚙入る時は大熱を發し二三日中には必ず死去するに至ると聞く越後にも此れに類する蟲ありて其の爲め死する者ま〻ある由或る醫學士の說に此れはマレリヤ熱を生ずるものと同種なりと知らず秋田縣下の小虫も是れと同種なるや否や猶ほ實驗の上他日報道をなすべし